

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 安田 昌代
学位 博士 (歯学)
学位記番号 新大院博 (歯) 第430号
学位授与の日付 平成31年3月25日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 口腔乾燥感をもたらす要因の性別および年齢別検討

論文審査委員 主査 教授 小川 祐司
副査 教授 井上 誠
副査 教授 葭原 明弘

博士論文の要旨

【目的】

口腔乾燥症には、唾液分泌量低下の有無に関わらず、口腔乾燥を感じるものと客観的な唾液分泌量の低下を伴うものがある。その原因として、シェーグレン症候群、ストレス、薬剤の副作用、放射線照射、全身疾患によるものなどが挙げられている。口腔乾燥感や、痛みのように、患者の乾燥に対する感受性によるところが大きく、客観的指標である唾液分泌量と主観的な口腔乾燥感とは必ずしも相関しない。近年、眼、鼻、口腔、膣、皮膚における乾燥感を一つの乾燥症候群として捉えようとする「ドライシンドローム」という概念が発表されている。日本人女性を対象とした調査によると、約半数が眼、鼻、口腔、膣、皮膚のうち、2か所以上で乾燥を感じており、Quality of life (QOL) の低下につながっている可能性がある。口腔乾燥感に関連する要因を明らかにすることが出来れば、口腔乾燥感の出現を予測し早期に対処することができ、ひいては、QOLの向上につながる可能性がある。したがって、本研究では、口腔乾燥感に関連する要因を年代別に検討することを目的としてWeb調査を行った。

【対象及び方法】

本研究は、Web調査「お体の症状に関するアンケート」の一環としてマクロミル社 (東京) に依頼して実施した。対象者は20歳以上の一般男女とし、20～70代の各年代の男女それぞれ62名の計744名とした。45項目からなる質問項目のうち、本研究では対象者特性、既往歴、更年期症状、乾燥感、QOLに関する項目を使用した。対象者特性として、性別、年齢、職業の有無、収入、既往歴、服薬を調査した。全身の乾燥感については、口腔、眼、鼻、皮膚、膣のそれぞれについて4段階 (1:強い、2:中程度、3:弱い、4:なし) の選択肢を設けた。舌痛、味覚低下、自発性異常味覚、歯肉出血、顎関節痛、咽頭閉塞感、嚥下困難感についても、同様に4段階で調査した。更年期症状については、日本産婦人科学会により作成された日本人女性の更年期症状評価表を用いて、同様に4段階で調査した。QOLについては健康関連QOLを測定する日本語版SF-8を用いた。統計解析は対象者を性別、年齢別 (44歳以下、45-55歳、56-64歳、65歳以上) の8群に分け、さらに口腔乾燥感あり、なしとして群分けした。性別、年齢別の群ごとに、口腔乾燥感の有無と各項目との単変量解析を行い、その後、口腔乾燥感と関連する因子を検討するために、口腔乾燥感の有無を従属変数、単変量解析で有意であった項目を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。

【結果および考察】

対象者744名のうち、3名は回答に不備があったため解析から除外し、741名 (男性370名、女性371名) のデータを使用した。既往歴のない者は436名 (58.8%) で、主な既往歴は、男性では高血圧が最も多く84名 (22.7%)、次いで脂質異常症39名 (10.6%)、女性では、高血圧40名 (10.8%)、次いで子宮筋腫27名 (7.3%) であった。口腔乾燥感有訴者は、いずれの性別および年代でも約3-4割であった。そのうち、男性では44歳以下が44.1%、女性では45-55歳が46.2%と最も多かった。口腔乾燥感の有無と対象者の特性、既往歴、服薬などの各因子との単変量解析結果、年齢との関連が認められたのは、45-55歳の男性、56-64歳の女性、65歳以上の女性においてのみであった。既往歴では、45-55歳の男性において高血圧を有する者に口腔乾燥感が有意に多く認められた。また44歳以下の女性では子宮内胎着を、45-55歳の女性では脂質異常症を、65歳以上の女性では甲状腺疾患を有する者に、口腔乾燥感が有

意に多く認められた。服薬の有無と口腔乾燥感の有無との間に有意な関連が認められたのは、45-55歳の男性と44歳以下の女性においてのみであった。また、QOLについて、44歳以下を除く全ての年代の男性および44歳以下の女性ではPCSが、65歳の男性を除く全ての年代の男性においてはMCSが、口腔乾燥感を有する者において有意に低くなっていた。口腔乾燥感と、眼、鼻、皮膚、膣のうちの乾燥する部位の数、口腔に関連する症状、更年期症状との単変量解析の結果、いずれの性別、年代においても、口腔乾燥感を有する者の方が口腔に関連する症状や更年期症状を有意に強く呈していた。また、眼、鼻、皮膚、膣の乾燥も口腔乾燥感を有する者の方が、有意に強くなっていた。さらに、口腔乾燥感と関連する因子を検討するため、ロジスティック回帰分析を行った結果、男性ではすべての年代において乾燥部位数のオッズ比が高く、女性では65歳以上の年代以外で乾燥部位数のオッズ比が高く示された。本研究の結果、口腔乾燥感と関連がある因子は、性および年代によって異なるが、眼、鼻、皮膚、膣のうち乾燥を感じる部位の数が多いほど、口腔乾燥を感じるリスクが高いことが明らかになった。眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科などにおいて、乾燥を主訴に受診した患者に対し、口腔の乾燥感の有無を問い、乾燥感を有する者には、歯科を受診するように指導することにより、口腔乾燥感の早期発見、早期加療につながる可能性があると思われる。

審査結果の要旨

口腔乾燥とは、いわゆる口腔乾燥症と呼ばれている疾患や症状の別称であるが、臨床場面でも使用されるようになってきた。欧米では人口の最大約25%が口腔乾燥症に罹患しているとの報告があり、わが国でも相当数の潜在患者が推定される。自覚症状として口腔乾燥感を訴えるが明らかな唾液分泌量の低下を認めない症例から、著明な唾液分泌量の低下とそれに伴う顎口腔機能異常を認めるものまで多岐にわたるとされる。したがって、口腔乾燥感に関連する要因を明らかにすることが出来れば、口腔乾燥症の出現を予測し早期に対処することが可能となり、QOLの向上につながる可能性をももたらす。本研究はWeb調査をベースに、口腔乾燥感に関連する要因を年代別に検討することを目的とした。

対象者は、20~70代の各年代の男女それぞれ62名の計744名である。質問項目として、対象者特性、既往歴、更年期症状、乾燥感、QOLを使用し、乾燥感については、口腔、眼、鼻、皮膚、膣のそれぞれについて4段階（1：強い、2：中程度、3：弱い、4：なし）の選択肢を設けた。舌痛、味覚低下、自発性異常味覚、歯肉出血、顎関節痛、咽頭閉塞感、嚥下困難感についても4段階で調査した。更年期症状については、日本人女性の更年期症状評価表を用いて、4段階で調査した。QOLについては日本語版SF-8を用いた。結果として、回答に不備があった3名を解析から除外し、口腔乾燥感有訴者は、いずれの性別および年代でも約3-4割であった。そのうち、男性では44歳以下が44.1%、女性では45-55歳が46.2%と最も多かった。既往歴では、45-55歳の男性において高血圧を有する者に、44歳以下の女性では子宮内腺症を、45-55歳の女性では胡質異常症を、65歳以上の女性では甲状腺疾患を有する者に、口腔乾燥感が有意に多く認められた。また、QOLについても、口腔乾燥感を有する者において有意に低下が認められた。さらに、ロジスティック回帰分析を行い、男性ではすべての年代において乾燥部位数のオッズ比が高く、女性では65歳以上の年代以外で乾燥部位数のオッズ比が高く示された。

本研究はWeb調査によるデータ取得であるため、対象集団に偏りがあることや、基本的な生活習慣としての栄養摂取や食事に関する情報が不足していることが懸念である。また、対象者との対面式調査でないため、口腔内（診査）情報も欠落しているが、反面、女性特有の症状や悩みなどはWeb調査によって恥ずかしさを感じることなく回答できるため、精度が上がる利点も考えられる。

結論として、性および年代によって異なるものの、眼、鼻、皮膚、膣の乾燥を感じる部位の数が多いほど、口腔乾燥を感じるリスクが高いことが本研究により明らかになった。本研究には学位論文として十分な価値があると考えた。また、論文内容に関する試問に対しても十分な回答を得ることができた。よって、博士（歯学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。